

新たな自己点検活動開始から1年、 第2ステージへ

大学評価室担当常務理事 浜村彰 1

シリーズ対談(第1回):大学評価とFDは質保証の両輪

公文簿大学評価室長×川上忠重FD推進センター長 2

保護者アンケートの結果から 3

新大学評価システムについて 4

2009年度の自己点検・評価を振り返って 5

NEWS/活動報告/編集後記 6

MESSAGE

1

新たな自己点検活動開始から1年、 第2ステージへ



大学評価室担当常務理事
浜村 彰

大学評価室が設置されてから1年余り経過する中で、2009年度には新しい自己点検評価体制の下に第1回目の全学自己点検・評価が行われました。各学部等から提出された自己点検報告書に対する評価委員会からの辛口なコメント、それに対する学部等からの強い異議申し立てがなされるなど、両者の緊張感ある応酬の末に分厚い「2009年度自己点検・評価報告書」が出来上がりました。その間には、学部長懇談会で学部の自己点検報告のプレゼンテーションと意見交換が行われ、相互の刺激を通じた新たな自己発見と改善のヒントを見出す機会を設けることもできました。

第2ステージとなる2010年度の自己点検活動は、2011年度から始まる大学基準協会の新しい認証評価基準に準拠しながら、外部評価がビルトインされた自己点検評価サイクルに従って各セッションが主体的に改善活動を行うことになります。とりわけ、大学および学部・研究科等の各部署は、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーなどの教育方針・目標の明確化とその達成度の自己評価を通じて教育の内部質保証に取り組むことが求められます。

教職員の皆様にはご負担をおかけしますが、大学のさらなる発展のためにご協力をお願いいたします。

シリーズ対談 (第1回) : 大学評価とFDは質保証の両輪



公文 溥 [大学評価室長] × 川上 忠重 [FD推進センター長]

法政大学における内部質保証のあり方を考える企画として「シリーズ対談」をスタートさせました。
第1回は、FD推進センター長・理工学部教授 川上忠重氏をお招きしました。

✦ 大学評価室の2009年度の取組

公文 本日は、大学評価室とFD推進センターの協力に関してお話をしたいと思います。まず、私のほうから2009年度の評価室の活動を紹介させていただきます。自己点検評価活動が中心ですがその成果は『法政大学自己点検評価報告書』として公表いたしました。さらに満足度に焦点を合わせて、卒業生、新入生、保護者からのアンケート調査を行いました。そして、新たな情報システム(可視化システム)も構築しました。この1年間の活動を踏まえて、2010年度の自己点検活動の課題としては、内部質保証の実質化と到達目標の修正・追加の二つをあげております。

✦ 教育開発支援機構 FD推進センターの活動状況

川上 教育開発支援機構FD推進センターでは、『『自由と進歩』の建学の精神に基づく教育理念と教育目標を達成するためになされる、教育及び学びの質の向上を目的とした教員・職員・学生による組織的・継続的な取り組みを、FDと定義する』としています。この定義に基づき、単位の実質化で求められる学習の促進方法などについて各教学単位で話し合うためのツールとして「振り返りシート」の提供や、本学のFD活動のさらなる推進のため各種テーマのシンポジウム及びフォーラム開催、「授業改善」のための「学生による授業改善アンケート」、「FD学生の声コンクール」の実施、新入生向け「学習支援ハンドブック」や「法政大学教育研究」等も発刊しています。

✦ 質保証の「両輪」

公文 ところで、大学は、人材育成機関としての意義を問われています。ディプロマポリシー(如何なる能力を持った学生を育成するのか)を明確にし、そのためのカリキュラムおよびアドミッションポリシーを立てることを社会から要請されております。いうまでもなく学部等がポリシーの実行主体となりますが、それを支援する学内

組織は二つあるとおもいます。大学評価室とFD推進センターです。この二つの支援組織が質保証と向上の両輪です。評価室は、各運用単位に質保証と向上に関する組織としての自己認識を促し、課題を示すことが任務で、FD推進センターは質保証と向上のための教職員による具体的・組織的な取り組みを提案し支援することが課題だと思います。二つの組織は別々に設置されたのですが、連携関係を持つ時期に来たと思います。

✦ FD推進センターとしての抱負

川上 公文大学評価室長がおっしゃったように、中央教育審議会から2008年12月に発表された「学士課程教育の構築に向けて(答申)」では、「学士課程教育の充実のための具体的な取り組みとして、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針の三点」を改善すべきであると指摘されました。学士課程教育と教育の質保証という総合的な観点からの議論や提案は、当然、全学として取り組まなければならない、また、これらを成し遂げるためにFD推進センターとしても、さらに入口と出口に対する接続を踏まえつつ、大学評価室と協力しながら、教育の質的向上に向けた全学的な教育支援施策の企画・開発、より実効的なFDの推進と各学部等と密接した形でのFD活動の支援を行っていきたいと考えています。

✦ 学部内の自己点検とFD

公文 大学評価室は、前述のように各学部の内部質保証システムの構築を課題として掲げています。それは、大学評価室の仕事が単に大学基準協会の認証評価を受けるためだけに終わらず、各学部の継続的な改善・改革のシステムの構築を支援することにあるからと考えます。FD推進センターにも、大学の全体的なFD施策の提案とともに、学部内部におけるFD推進体制の構築の応援を期待します。それによって、各学部内部における自己点検評価活動と連動したFD活動が可能になるからです。

保護者アンケートの結果から

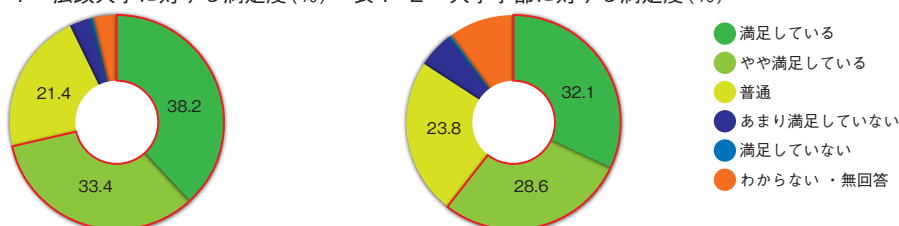
学部学生の保護者2000名を対象にアンケート調査

2009年11月から12月にかけて、学部学生の保護者2000名を対象にアンケート調査を実施しました。保護者を対象とした大規模な調査は初めての試みとなります。ここではその結果を抜粋して紹介します。

まず、アンケートの回収率ですが、770名(38.5%)の皆様から回答を頂きました。これは通常の郵送式アンケートの回収率に比べて高い数値であり、保護者の方の大学に対する関心の高さが伺えました。また、回答者の属性は父親が41.4%、母親が56.4%でした。

I. 現時点で法政大学および入学学部に対してどの程度満足していますか。

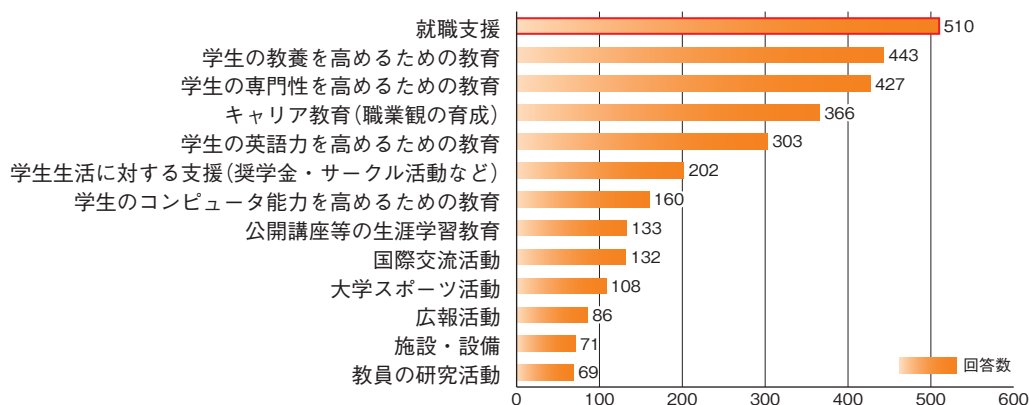
表1-1：法政大学に対する満足度(%) 表1-2：入学学部に対する満足度(%)



法政大学に対する満足度(「満足している」または「やや満足している」)は71.6%、入学学部に対する満足度はそれより若干低い60.7%となっています。

II. 法政大学が今後さらに充実すべき点は何だとお考えですか。

表2：本学が今後さらに充実すべき点(回答数の多い順)

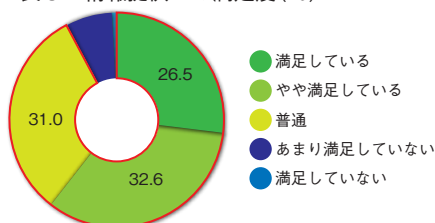


昨今の経済状況を反映してか、就職支援の充実を望む声が一番大きくなっております。次いで、教養教育、専門教育、キャリア教育の順となっています。

III. 大学からの情報提供について

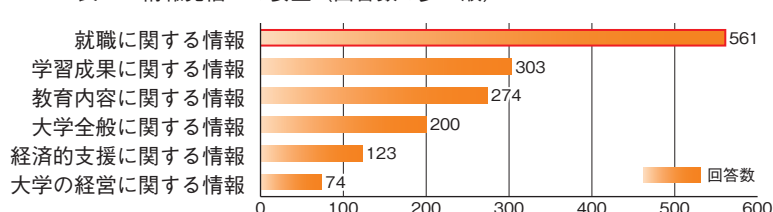
(1) 情報提供について満足していますか。 (2) どのような種類の情報をもっと発信すればよろしいでしょうか。

表3：情報提供への満足度(%)



普通を含めると9割以上の方が現状に満足していると回答しています。

表4：情報発信への要望(回答数の多い順)



こちらでも、就職に関する情報の発信を求める声が最も多くなっています。

まとめ

初の保護者アンケートでしたが、大変興味深い結果となりました。保護者が就職に対して強い関心を持っていることが数字からも明らかになりました。今後も継続的に実施し、保護者からの率直な意見を求めていると考えています。

新大学評価システムについて

新システムの概要

2009年10月に大学基準協会は平成23年度以降の大学評価システムを公表しました。ここでは新システムの概要を説明します。

✦新システムの基本方針

- 1) 自主・自律を掲げる大学にとって、評価とは、「されるもの」ではなく、自らの意思で「行うもの」とであるという意識の定着を図る。
- 2) 自己点検・評価の質を向上させ、自らの判断と責任において評価結果を改革・改善に繋げる内部質保証システムの構築を支援する。
- 3) 多岐に渡って設定されてきた従来の評価項目の数を大幅に削減することで、大学にとっても評価機関にとっても、評価に係わる負担を可能な限り軽減できるようにする。

✦新評価項目

評価項目が大幅に整理・縮減されました。

新大学評価システム－評価項目の整理－

1	理念・目的	(2-3)
2	教育研究組織	(2-2)
3	教育内容・方法 (①教育課程、②教育方法、③国内外との教育研究交流、④学位授与・課程修了の認定)	(36-81)
4	学生の受け入れ	(20-29)
5	学生生活	(6-17)
6	研究環境	(7-19)
7	社会貢献	(3-13)
8	教員組織	(11-27)
9	事務組織	(6-12)
10	施設・設備	(8-16)
11	図書・電子媒体等	(2-5)
12	管理運営	(7-15)
13	財務	(6-8)
14	点検・評価	(4-8)
15	情報公開・説明責任	(3-4)

1	使命・目的	(3-5)
2	教育研究組織	(2-3)
3	教員・教員組織	(4-10)
4	教育内容・方法・成果 (①教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、②教育課程・教育内容、③教育方法等、④教育成果)	(12-30)
5	学生の受け入れ	(4-7)
6	学生支援	(4-9)
7	教育研究環境	(5-12)
8	社会連携・社会貢献	(2-5)
9	管理運営・財務(①管理運営、②財務)	(6-18)
10	内部質保証	(3-9)

() 内の数字は、(評価項目の数－評価の視点の数)を表す

(評価項目－評価の視点) : (123-259) ▶▶▶ (45-108) に縮減

✦新点検・評価項目の特徴

- ・学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、学生受け入れの方針など**方針の明確化**が求められること。
- ・「内部質保証」の項目が設定されたこと。

なお、新システムの詳細は、大学基準協会のホームページにガイドブックとして公表されております。是非ご覧ください。

大学評価室では、この新大学評価システムにいち早く対応した形で、2010年度からの自己点検・評価を進めていきます。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

2009年度の自己点検・評価を振り返って

2009年度の自己点検・評価活動を振り返った感想を5人の方をお願いいたしました。

2009年度自己点検評価報告を終えて

2009年度人文科学研究科日本史学専攻主任 長井純市

4月から専攻主任となる直前の前年度末に課された様式3 (2009～2012年度中期目標設定) および同5 (2006～2008年度自己点検報告書)の作成が仕事始めでした。ただし、後者は前主任が引き受けてくれました。7月に3つのポリシー (アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー)を定め、9月には人文科学研究科全体の自己点検評価に対する大学評価委員会の低い評価に意見申し立てが行われ (その結果、評価が上がりました)、10月には中間報告書 (様式4)、2010年2月には年度末報告書 (同左)をそれぞれ作成しました。本専攻は、2011年度より東洋史・西洋史両コースを含む史学専攻となり新たなスタートを切ります。そのために文科省との折衝もあり、他方、大学院全体の改革作業もあり、自己点検評価の作業はそれらと並行しました。めまぐるしい一年間の中で課題も残りましたが、大学全体の発展の一翼を担うべく本専攻の展望が開けました。

個別評価と全体評価のリンクを意識的に!

2009年度政策科学研究科長 池田寛二

専攻として発足してから2010年度で10年目を迎える政策科学研究科は、近年いかに安定的に入学者を獲得するかが深刻な課題となっていますが、その要因を客観的かつ冷静に認識するために、今回の厳しい評価が大いに役立ったことは間違いありません。誰もよい評価を得られる方が安心できますが、むしろ厳しい評価を与えられてこそ、問題を発見し、解決・改善の方途をより明確に見定めることができるのだと思います。ですから、これからますます厳しく評価していただきたいものです。とはいえ、ひとつだけ気にかかることがあります。それは、教学・研究組織の個別の評価が優先されることによって、大学院全体の組織連関のあり方がきちんと評価されていないように感じるからです。同じような名前の研究科や専攻が並立していることの弊害などにも、厳しい評価の目を向けていただきたいと思います。

情報科学研究科での自己点検・評価活動

2009年度情報科学研究科長 大森健児

研究科の自己点検評価は学部のそれと比べると困難な

点が多い。学部は組織として対応しなければならないことが多いため、自己点検・評価活動を内在させることが容易である。これに対して、研究科は研究室単位での活動が主であることと、研究科自身が独立した組織とは言い難い面を持っているため、協働が必須である自己点検・評価活動の遂行には構造的な問題を抱えている。

ところで、2009年度はカリキュラムの変更が必要になってきた時期であり、活動の遂行が比較的容易な年であった。カリキュラム変更の必要性、新カリキュラムの考えなどを明確にした後で、カリキュラムの詳細化を進めた。また、2010年度の実施に向けて十分な準備をしたことで、今年度の自己点検・評価活動は満足に遂行することができた。

自己点検・評価活動と目標管理

人事部長 橋本サクエ

2009年度の自己点検・評価活動を開始するにあたり、事務組織としてはひとつの課題がありました。それは、2005年度より行っている「全管理職による部・課目標の設定とその達成度評価」と「自己点検・評価活動」をどのように有機的に結びつけていくかということでした。大学評価室との打ち合わせを重ね、本学独自の点検項目を設定可能とすることや、新たな様式を取り入れるといったことを行い、結果的に、管理職のみならず担当者を含めた全職員での、PDCAサイクルに基づく自己点検・評価活動への第一歩が踏み出せたと思います。次年度以降はこのしくみを維持しつつ改善を加えていきたいと考えています。

あたりの仕事

キャリアセンター事務部長 (前図書館事務部長) 丸山 悟

わたしが3月まで配属していた図書館は、新しい自己点検・評価活動が始まるまえから、計画をたて、結果を評価するという仕組みをつくっていました。この仕組みができていた理由は、図書館がインターネットという競合に対して優位性を保ち (あるいは開発し)、大学における存在価値を強く訴える必要があったためです。したがって違和感なく事を運ぶことができました。今後の課題は、自己点検・評価活動が「為さねばならぬ仕事」から「あたりの仕事」へと、いっそうの日常化をはかることです。

専門職大学院アカウンティング専攻が認証評価を受けました。

本年3月イノベーション・マネジメント研究科アカウンティング専攻は、財団法人大学基準協会より「経営系専門職大学院基準に適合している」との認定を受けました。認定期間は2015年3月31日までです。

点検評価企画委員の変更

経営学部教授 佐野哲 → 経営学部准教授 川島健司
 総長室課長 藤野吉成 → 総長室課長補佐 鈴木弘一
 任期：2010年4月1日～2011年1月20日

活動報告



第5回大学評価室セミナー



日時：2010年3月1日（月）13：00～14：40 場所：ボアソナード・タワー26階A会議室

「学士課程教育の質向上を目指して—国際的通用性の観点から」をテーマに、明治学院大学教授天野史郎氏による講演が行われました。グローバルな世界の出現により、高等教育もメガ・コンペティションの時代に突入し学位の国際的通用性が求められることやそれを受けての日本の高等教育の課題などについて刺激的なお話を頂きました。

2009年度自己点検・評価報告書を刊行

このたび、「2009年度自己点検・評価報告書」が完成し、公文大学評価室長から増田総長に手渡されました。本報告書には、各学部等の詳細な現状分析、中期・年度目標、および大学評価委員会による評価結果等が掲載されています。なお、本報告書についてはウェブ上でも閲覧可能です。



2009年度卒業生アンケートを実施

昨年度に引き続き、学位授与式に、2009年度卒業生を対象としたアンケート調査を実施しました。今年度は、新たに大学院修了生（専門職大学院を除く）に対しても実施しました。調査結果は次号で報告します。

自己点検・評価項目状況調査を実施

2010年1月から3月にかけて、専任教員を対象に「自己点検・評価項目状況調査」を実施しました。大学基準協会の点検・評価項目に照らして各学部等の状況がどうなっているかを問う意識調査で、昨年度に続いて2回目の実施となります。結果は学部長・研究科長にフィードバックされ、現状分析や目標設定に利用されます。

2010年度自己点検に関する説明会を開催

2010年3月25日に学部長・教授会主任を対象とした自己点検に関する説明会を開催し、2010年度の自己点検活動がスタートしました。冒頭、増田総長から、認証評価の動向についての説明や学部等における質保証に対する決意の挨拶を頂きました。

説明会は大学院、研究所、事務部門を対象に順次開催しております。

編集 後記

大学評価室ニューズレターの愛称が「+QA」になりました。これは、いままでの法政大学に「質保証（クオリティ・アシュアランス）」の機能を加えパワーアップを図ろうという強い意志を表しています。本学では質の向上・保証という共通のテーマで様々な部局で議論が始まりました。法政大学が一丸となって社会に対して質保証とい

う観点から説明責任を果たしたいと考えています。もうひとつの意味としてこのニューズレターがQ&Aのように問題点を少しずつ解き明かしていくための情報提供ツールとなれば幸いです。ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。（事務局）